

「ゾーサマ」「ズゾウサマ」と呼ぶ地蔵様が建立された意図は、多くは死者の供養であり村境・四ツ辻・墓場入口などの境目に建立された。夭折した子供を救うのが地蔵菩薩であることや、また真宗の教えに「地蔵と阿弥陀は同体なり」という観念があるために地蔵が多く建立された。

地蔵祭りも昭和四〇年代まで子供達により主体的に続けられていたが、少子化や課外活動や学習塾などの社会の多様化により衰微した。

墓場の地蔵

金戸墓場の入口に地蔵堂があり三体の地蔵が安置されている。高速道路下にあった元の墓場、中知山内へ通じる路傍、昭和三十年代まであった火葬場前などに建てられていたものが一同合祀



されたものと推測される。その真横の石柱には南无阿弥陀佛が刻まれているが、江戸時代まで遡る古さがあり、元火葬場場の前に建立されていた。



片桐家背戸の地蔵

山田市の下町で町川の淵に位置する場所であり、往古は野田の墓場が金沢道と湯涌道へ別れていた。その湯涌道が此の道であった。昭和四〇年代まで地蔵祭を行っていたのは金戸での重要な道筋であったからである。



野田地区も墓場で地蔵祭りを今日も実施しているが、その場所が金沢道とゆわく道の分岐点であり金戸の町川沿い



に湯涌道が上がっていた。現在細木宮にある道標は野田の墓場にあつたものが、基盤整備の折りに関係者の不見識により間違つて移したものである。

お駒の地蔵

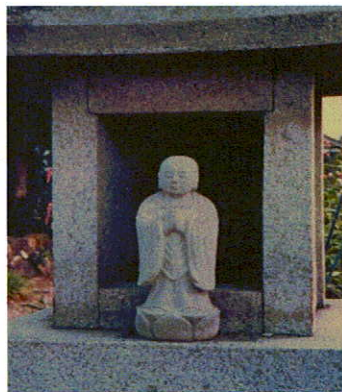
専徳寺前に立つ「おこまの地蔵」とは、梅原村持の山へ盗伐に入り、九兵衛の前まで追い立てられて、山番に斬り殺された吉兵衛の供養のため、女房の「おこま」が建てたものです。盗伐は「疵付候而も、仮當座(その場)ニ相殺候而も百姓共不念ニ罷成間敷候條、少もなつミ不申捕可申候」と罪にならないのであつた。

元はかんじやの木の下にあり、その木を削ると赤い汁がでると云われた。



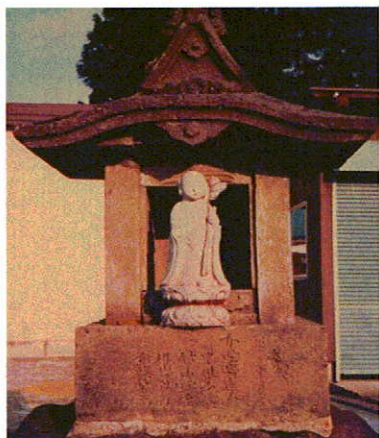
吉盛吉太郎の地蔵

お駒の地蔵と並んで吉盛吉太郎供養のために妻さとが昭和六年三月建立した地蔵がある。吉盛家は森井と神本の間にあったが昭和初期には退転している。元の屋敷跡にあってが基盤整備の折りに移された。建立には隣のよしみで神本正年が世話人として手助けしていた。



石崎前にあった地蔵堂

市次郎横に建つ地蔵堂は、元は石崎の前にあった。碑文には本堂寄進人として中川甚之丞・竹山藤三郎・北山與一郎・東頭長右衛門とある。明治期に建立されたが、由来は不明である。



盛田和三郎の地蔵

盛田工務店の地蔵は、社標を寄進した盛田和三郎が子供の供養に建立したものである。



神本家の供養地蔵

昭和五一年孫の正和君が自宅前の県道で交通事故で亡くなった。その菩提供養のために昭和五一年十月に建立された。傷ましいことに祖父の正年氏が昭和五九年に同じ場所でひき逃げ交通事故で死亡した。



二宮尊徳像

金戸には石像・石碑以外に金銅像も建立されている。元南山田小学校にあった二宮尊徳像は現在ふれあい広場にある。昭和十年六月金戸出身で大阪在の盛田耕徳と塔尾出身の加門太蔵が二宮尊徳銅像を寄進したが、戦争の金属

回収により供出されていた。昭和二四年に盛田耕徳と加門太蔵の甥に当たる片桐金蔵と忠信の兄弟が前者の意志を継ぎ、小学校創立三〇周年記念事業として第二の二宮尊徳銅像を寄進した。

回収により供出されていた。昭和二四年に盛田耕徳と加門太蔵の甥に当たる片桐金蔵と忠信の兄弟が前者の意志を継ぎ、小学校創立三〇周年記念事業として第二の二宮尊徳銅像を寄進した。



句碑

金戸の俳人中川尚三が亡くなる直前に建てられた句碑が、瑞泉寺山門の右側にある。句は昭和三十四年作の「仏縁まんじゅしや華のみちを来し」石は座敷に上がる沓脱石で石工は岩城信嘉であった。序幕式は昭和三五年三月末の残雪があった。



葬儀は米田稻介の発案で俳句葬であり、式後に満花城・蚊竜洞・瑞泉・北安・丁軒・稻介・小葉・誼・桶銭塘（高岡）・今井四露史（福野合併初代町長）が句会をした。